

6
3
236

日本
書影
集
卷一

序

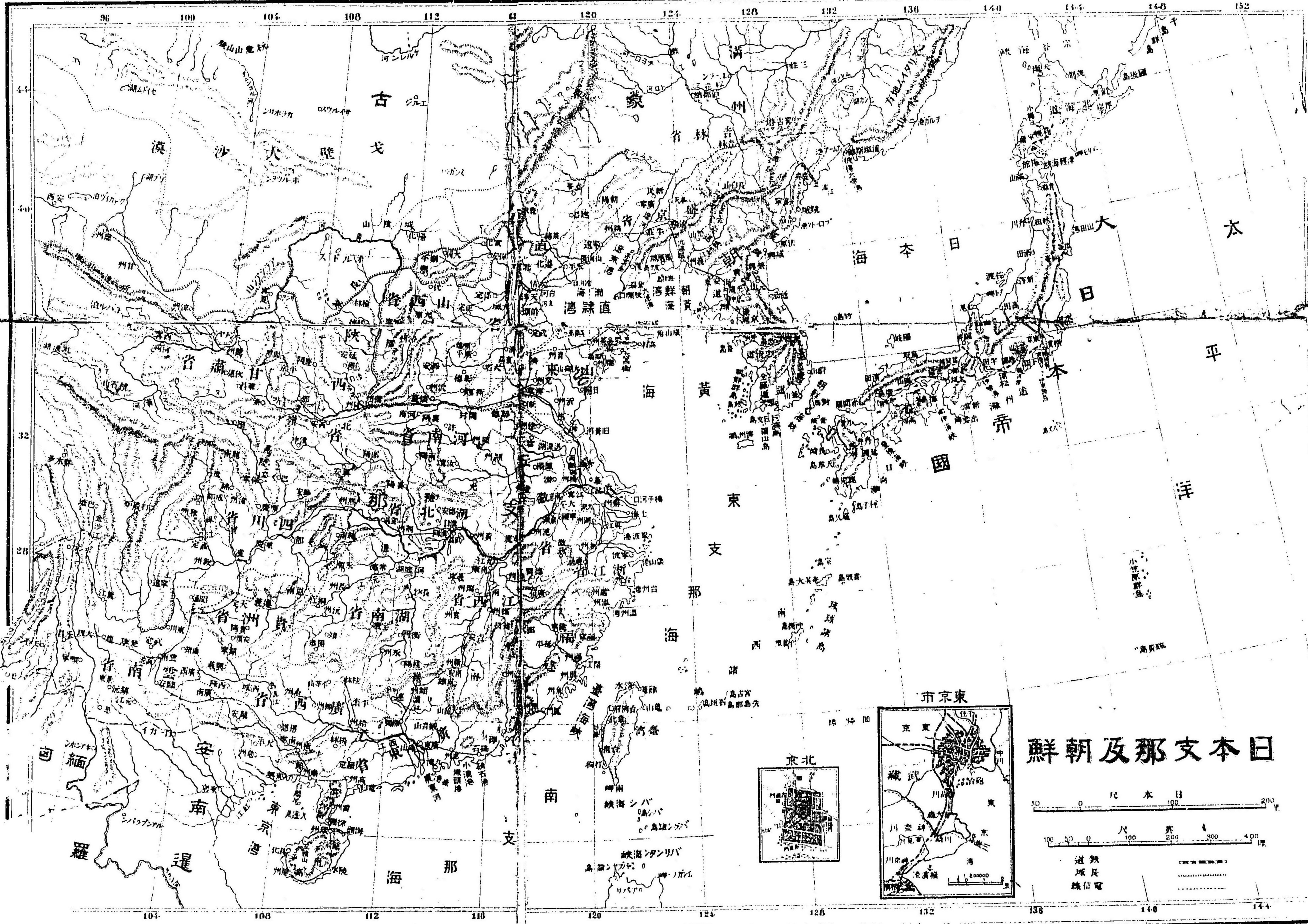


文難盡者。繪以補之。言難述
 者。畫以助之。繪畫之益於言
 文。蓋亦大矣。自古衣冠服色
 之制度。人物風俗之姿態。旌
 旗甲冑。器械什具之屬。世
 變草。所記錄不能知其詳。特
 至繪畫。裁得為身。恨上古
 之於能畫。傳今可見者。甚罕
 矣。久保田末僊。有畫中書。噴
 古嘗新。所見所聞。寫之無遺。
 而筆墨之妙。超然別出一機。

軸。真畫壇驍將。又偶雜林有
事。日與清將開鬪端。朱僊仔
長子朱齊。携筆從軍。朱齊出
右跨竈。寸。親目擊戰鬥之
狀。危急之際。備圖寫。筆力
縱橫。殆以臨其場。書肆大倉
氏。欲請以梓之。因將繕寫。而
督促日切。次子金僊。亦妙繪
事。共助之。全其藁。示余乞序。
余亦率爾。書之以與焉。

鴻齋居士石英樵



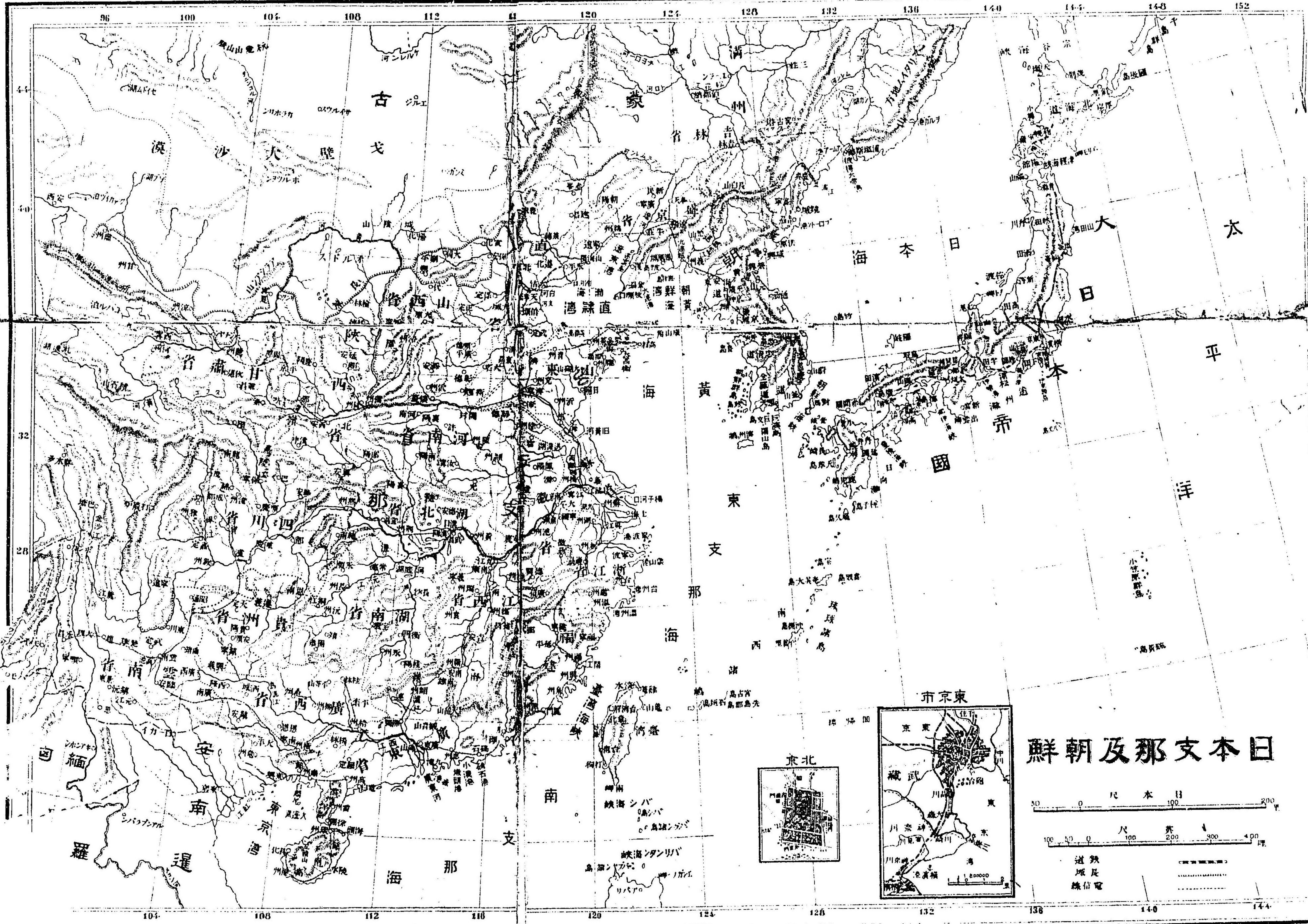
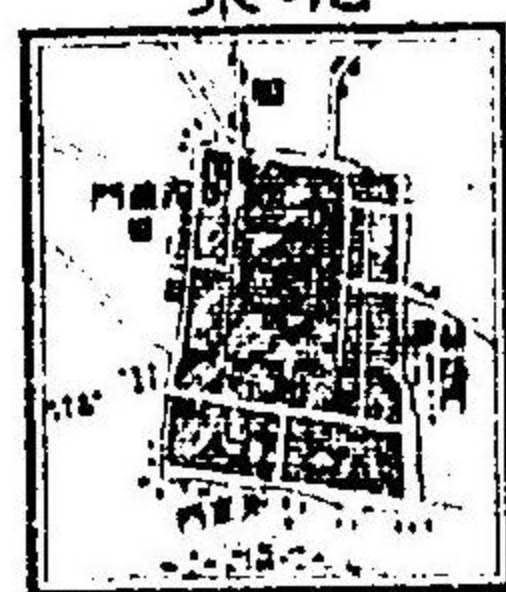


朝鮮及那支本日

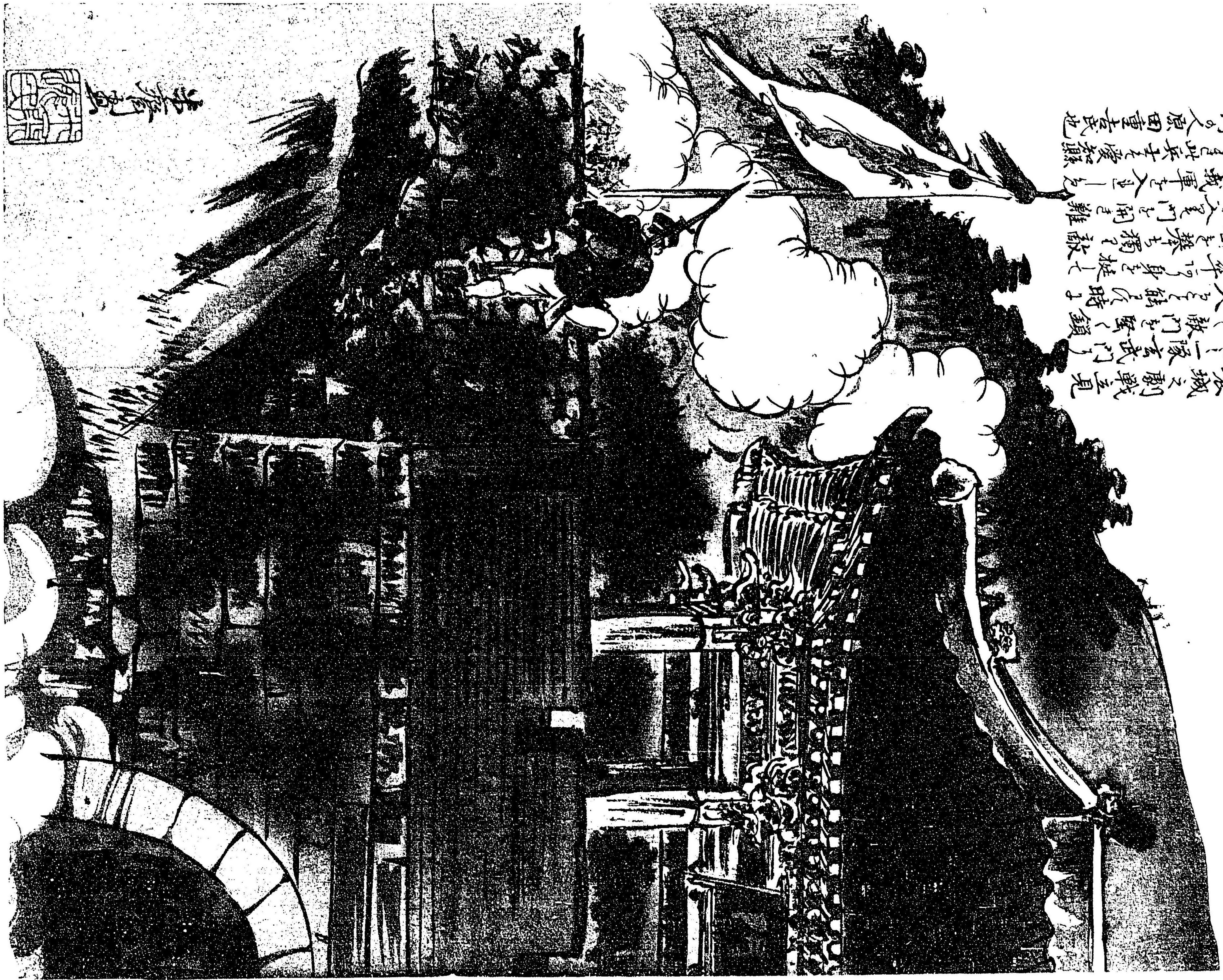
尺本日 0 100 200

尺英 0 100 200 300 400

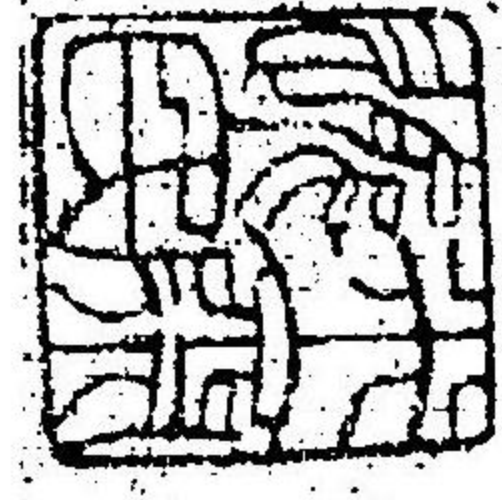
鐵路 城長 鐵信電

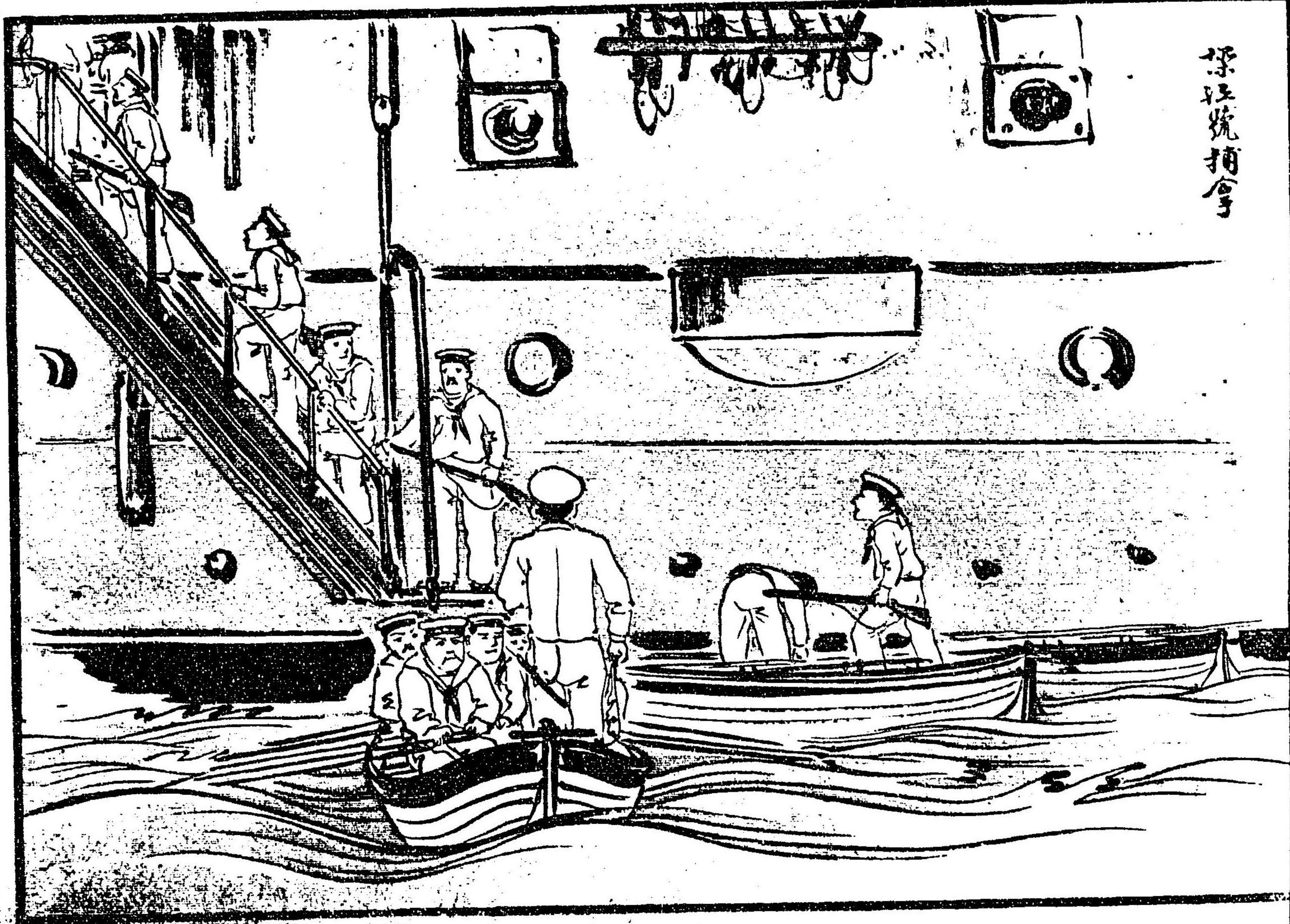


干壤城之劇戰之見
將一隊玄武門
少之敵門之堅之鎖
大入之能及時
六平何身之捷
居之擊之獨之敵
子之入之門之開之難
之戰軍之入之也
在自是此兵士之愛知縣
河之原田重吉也



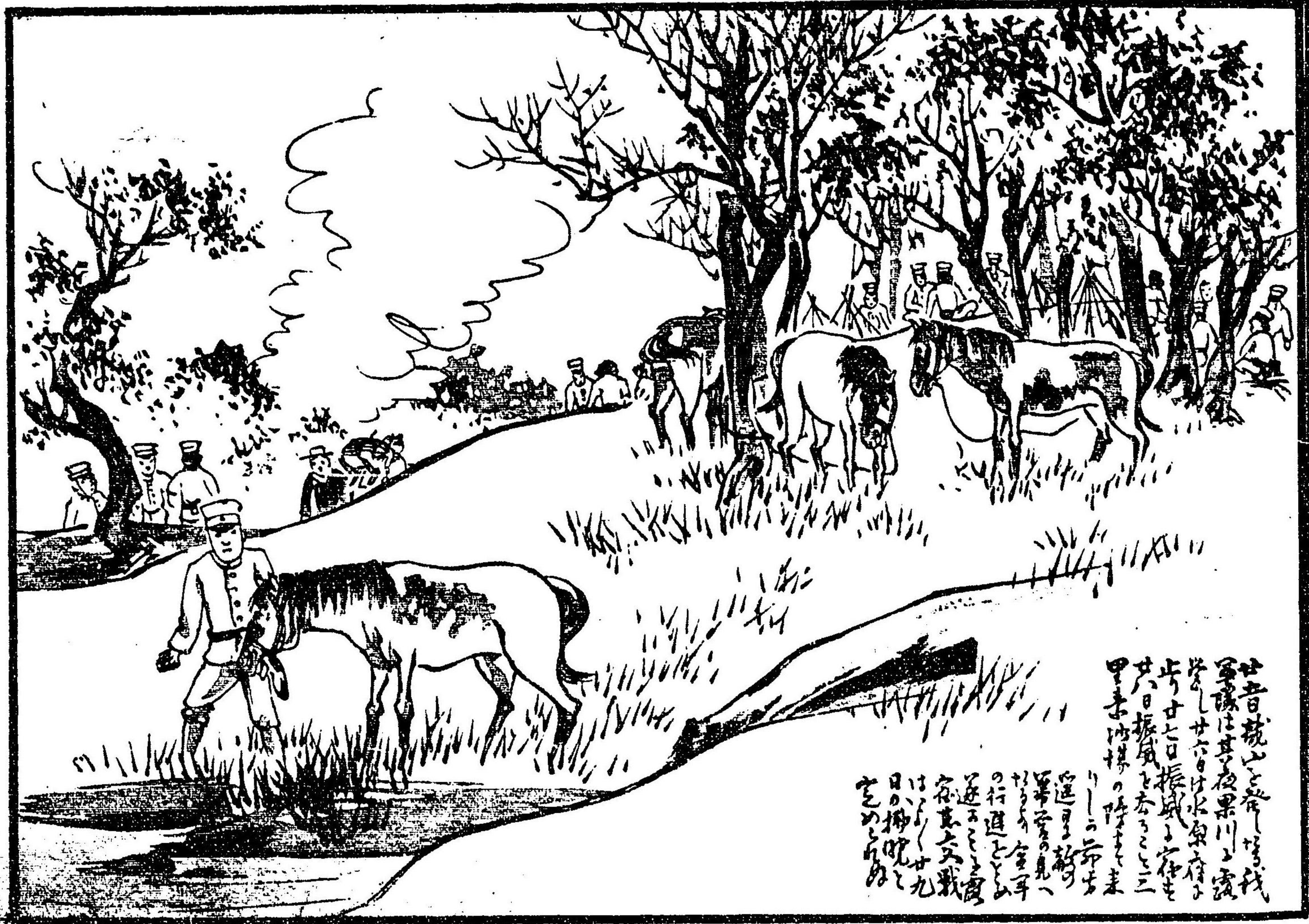
朱齊書





船中統制

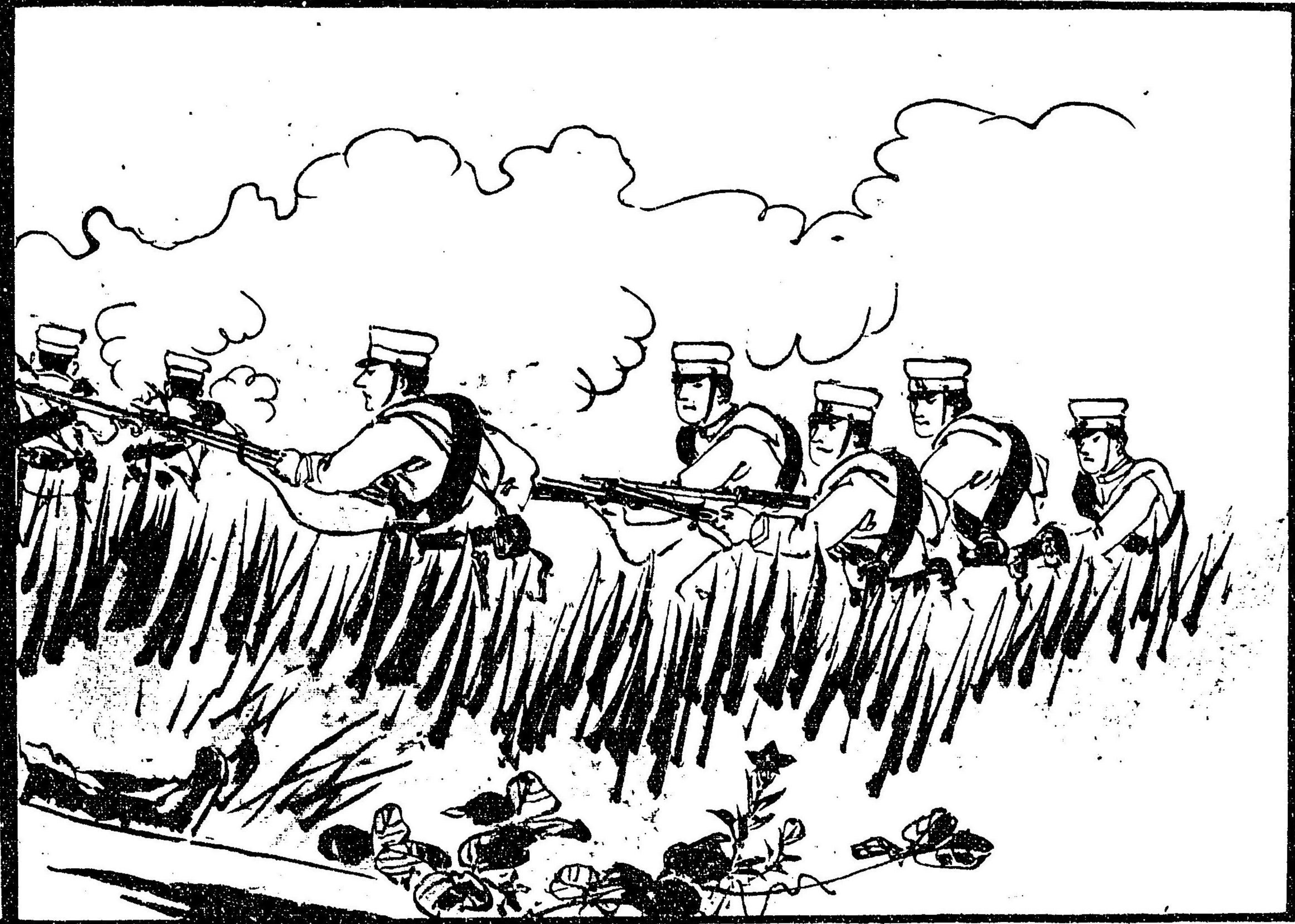


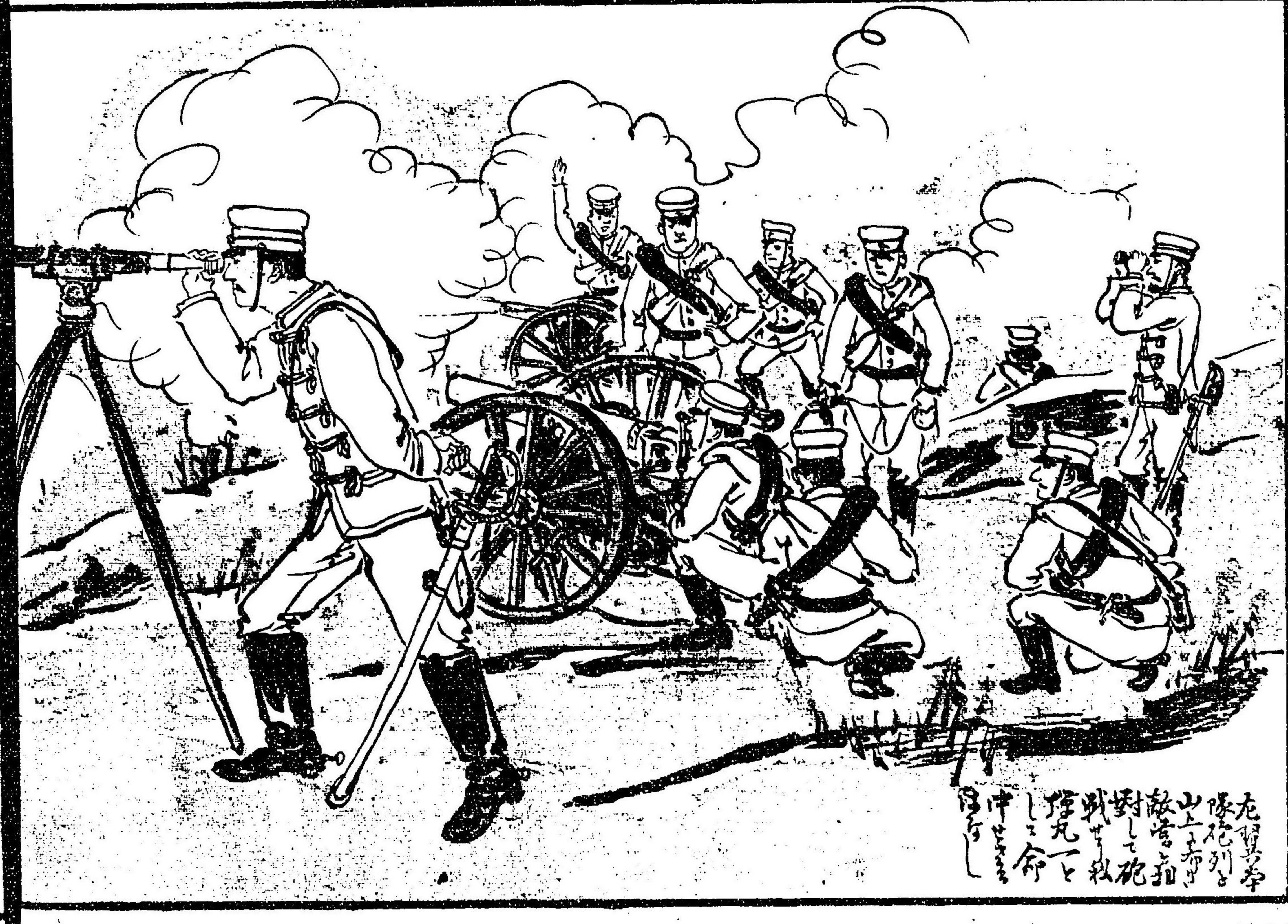


廿音 越山 之 兵 隊
 軍 隊 は 其 の 夜 果 川 上 露
 露 し 廿 六 日 水 泉 府 子
 止 廿 七 日 振 威 子 宿 營
 廿 八 日 振 威 子 宿 營
 甲 未 油 標 の 陣 末 未
 り 二 節 出
 迎 見 新 野
 軍 隊 全 年
 の 行 進 と 一
 不 遂 不 成 之 度
 在 其 大 戰
 日 日 拂 脱
 之 功 也

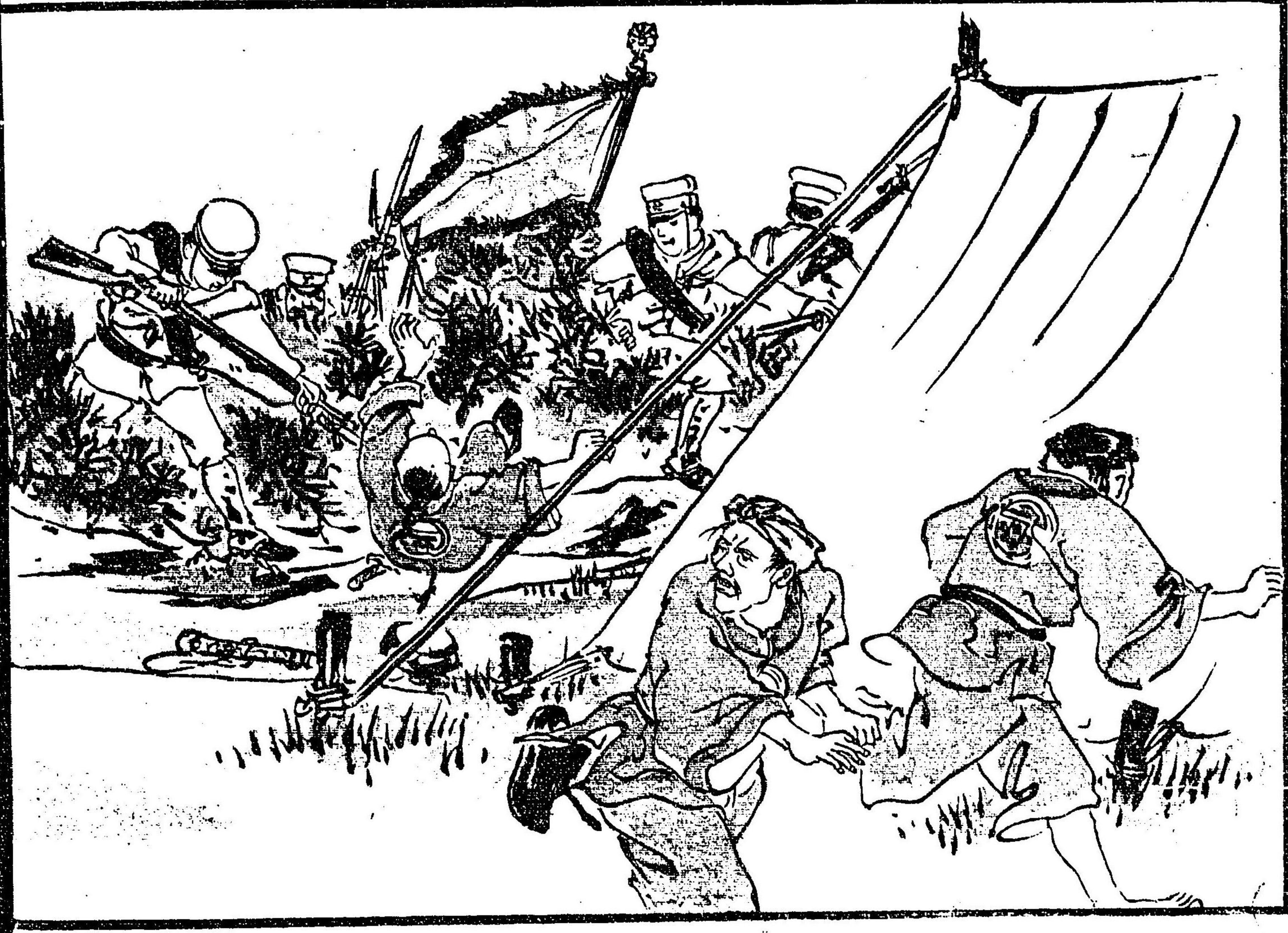


明治 二十 七年 七
 月 二十 音 越 山
 越 山 之 兵 隊
 牙 山 上 向 上 蓋
 解 府 子 宿 營
 頼 子 宿 營 牙
 山 駐 此 宿 營
 各 宿 營 掛 旗
 此 國 日 軍 軍 隊
 の 漢 江 銅 兵 隊
 と 海 軍 兵 隊





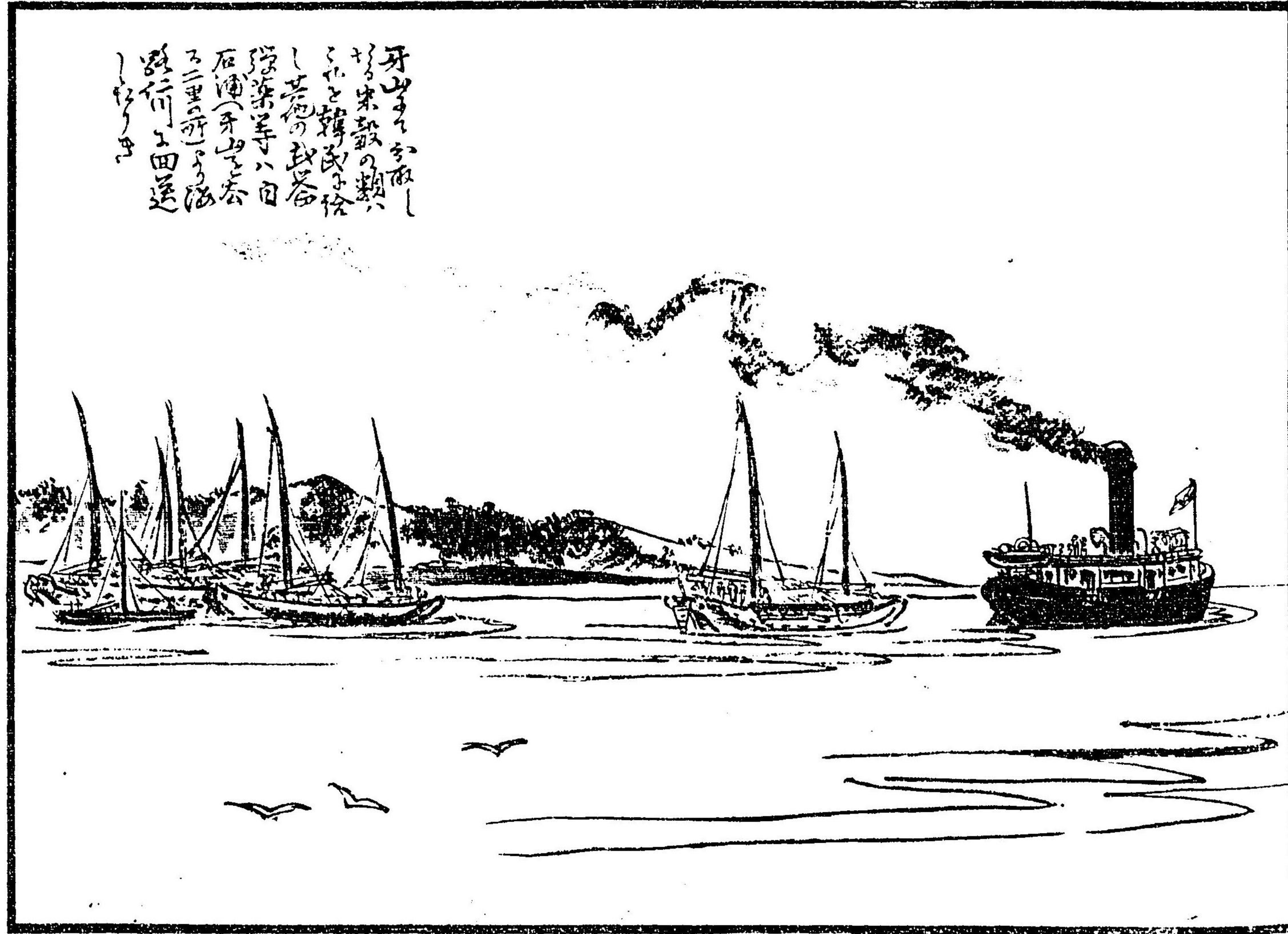
九段山
隊砲列
山上
敵營
對砲
戰中
九段
山
隊
砲
列
山上
敵
營
對
砲
戰
中
九
段
山
隊
砲
列
山上
敵
營
對
砲
戰
中



假細帶處
戰後安城後
群子設在坊



敵舟之近
三身山向
途上屢
雷雨懼

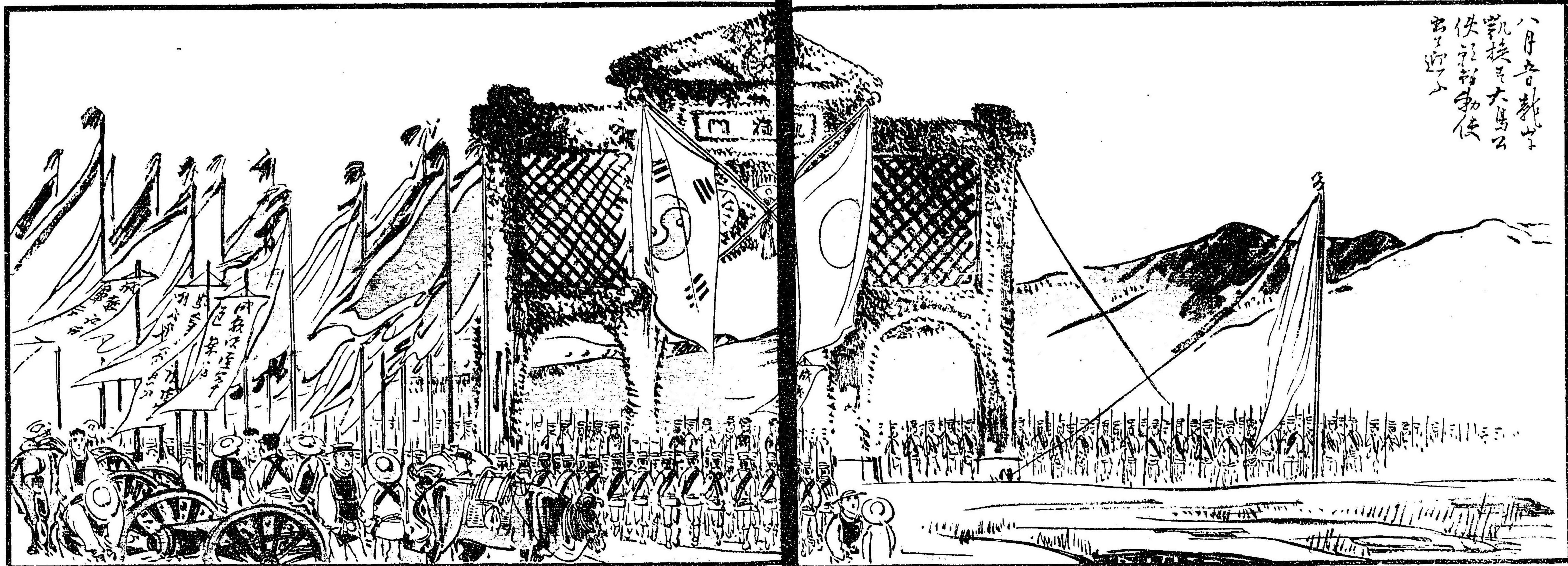


牙山を以て
 朝鮮の類は
 其の地を以て
 石浦(牙山)と
 三浦(牙山)と
 故何し田邊
 一とす

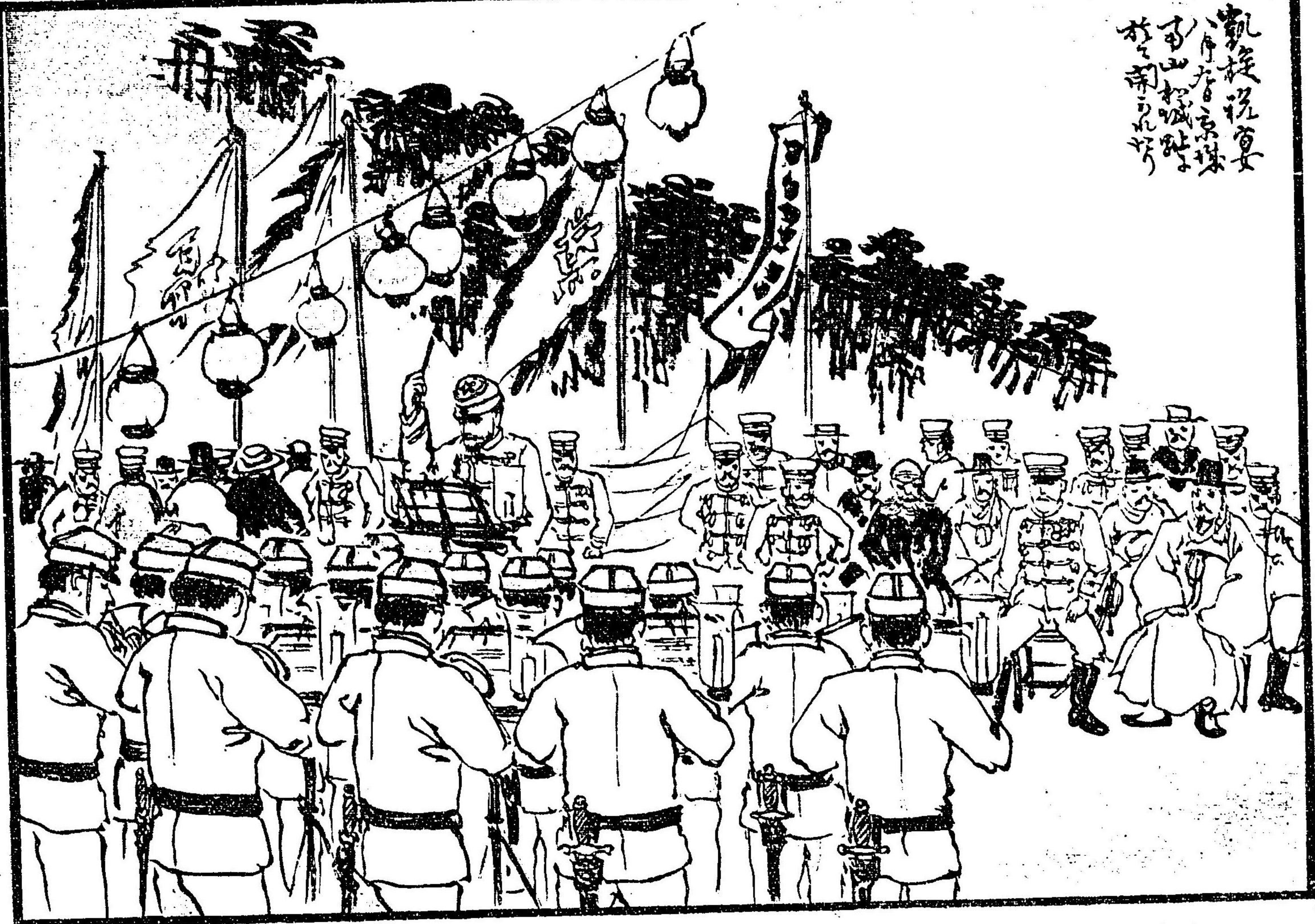


牙山を以て
 朝鮮の類は
 其の地を以て
 石浦(牙山)と
 三浦(牙山)と
 故何し田邊
 一とす

八月廿九日
凱旋大馬路
使館前
出迎



凱旋祝賀
 牙山駐屯
 大島旅團長
 大島圭介



朝鮮政府は遂に我軍隊に依頼して牙山に駐屯せる清兵を撤去せしめられたしこの旨を我公使館に首以來りたり此に於て我軍は七月廿五日午前十一時を以て龍山を出發し牙山の方へと進みけり。總大將は旅團長大島少將にて長岡、福島、武田の諸將校實に參謀たり。その日は京城を去る三里果川といへる一村落の松林中に露營し翌日は四里の道を歩みて水原府に至りこの日はこゝに露營せらるゝと定められぬ。この日京城なる大島公使より大島旅團長へ宛へたる書狀到來せりその文に曰く

在牙山清兵を撤去せしむる儀には昨二十五日朝鮮政府の外務省辨の署名調印を以て右取計方代辨の依頼有之候間御承知の上可然御取計相成度此段申進候也

明治廿七年七月二十六日

特命全權公使大島圭介

旅團長大島閣下

追而人馬雇入方に關する統理衙門の關文二十葉を差添申候

其一に曰く

捧甘京外各官

右甘爲和悉舉行事外國人云在内地賃雇車馬夫役即章程所載也現今日本兵辨當錢我京外各所軍輸物料東々但因雇夫賃馬每患不足復飾民人厚計雇費難便隨役云々據所申飾令到後遍飾境內民人遇有日人之要雇夫賃馬其勿阻礙受責屬役無至沮碍宜當者

甲午六月日(韓曆)

統理衙門

とありき又この夜平城騎兵大佐は使者として水原府の判官に面會し此夜所々を借り受けたる禮を途へ且つ謝金を送りて借いふ様我等糧食の米穀運搬に要する人夫牛馬等に不自由するに依り貴國のものを買ひ入れたし就ては貴官に於て周旋せられたしと依頼せらるゝに判官はさきの程は日本兵支那兵と同しく掠奪を事とするのみとのみ思ひ安き心もなかりしに今この懸懸なる禮を受くるのみ

ならず。米穀人夫等は相應の賃金を拂ふへしとの事に大に案外の思
をなし、且つ感し、且つ喜び、早速承引してそれく周旋したるを以て
我軍も大に便利を得たりき。

廿七日午前四時過水原府を發し、振威に着したるは午後四時頃なり
し。この日行程五里。振威に近きし頃大雨に遭ひ、我軍大に困難を極
めたり。

この前日まで支那斥候騎兵はこの振威の近邊に出沒してありしか
日本軍隊いよく近き來る由を聞くとそのまゝ、牙山の方へ馳せ歸
りけるどぞ。

二十八日午前五時振威を發し、白時峴といへるを越へて七原に達し
更に一里許進み行しに傍らに松林ある原中に出たり。この原の高
所より遙かに前面を見れば遙か彼方の山の根に雪一塊置きしか如
きものそこよに見へけり。望遠鏡を以て仔細にこれを見ればこれ
なん目指せる敵の清兵の幕營なりき。こゝに於て我軍は最早行進を
止め、この夜はこゝに露營する事に決し、敵の不意に襲撃を慮り松林
中に大砲を並へて砲列を布きたりけり。

こゝに野營する事と定められたるを以て兵士等は飲水を四邊に求
ひれども清き水あることなし。詮方なく濁りはあれども、凍れ居る田
の水を掬ひ、布を通して織かに飲用水としたりける。げにこの炎天の
行軍中に非常の困難を與へしは飲用するに足りぬべき良水の乏し
きにぞありける。偶々岩間もる清水を見出すものあらば、皆々走り寄
りてこれを飲む。この時の水は洵に一滴千金にも價へしぬべし。

これより先き第廿一聯隊第四大隊の一中隊は分遣隊として本隊と
離れ、陽城安城などいへる所を過ぎて忠清道に入り、天安より西に向
ひ、牙山の裏面に出てんとせり。又一方の分遣隊には廿一聯隊の第七
中隊より本間中尉は一小隊を率ひて振威より本隊と離れ、軍向浦よ
り、鶏頭津に出てたりけり。この鶏頭津といへるは牙山を去る三里の

白石浦と綴かに一水を隔てたるものなれば、若し清兵の逃げ來りし
とき、これを迎へ撃たんの計畧とぞ聞えし。借ても旅團は本隊を分ち
て左右隊となし、七月廿九日零時過左翼隊まづ露營地を發し、闇を冒
してしづくと進み行き、表沙場より左に折れて敵の側背へどこそ
向ひけり。歩兵第廿一聯隊第一大隊、第十一聯隊の第二第三大隊、砲兵
一大隊の將としては大島少將あり、長岡參謀、長福島中佐等皆この方
面に從ひ行きけり。

右翼隊なる歩兵第廿一聯隊第三大隊、同第七大隊は武内中佐これか
將として午前二時頃露營地を發し、三時五分といへるに安城渡の西
方大約七百メートルの一村落まで來りけり。真先に進みし松崎大尉
はこの所まで來りしとき、もしこの邊に清兵の忍び居る事もやどて
四邊に心を配り居たりしか、一人の韓人の逃げ損じたるものに出遇
ひぬ。直に呼び止めてこの邊に清兵居るや否やを尋ねしに未だ答を
得ざるその時突然敵の伏兵起りて、織かに三十メートルを隔て、一
度に銃を放ちけり。すはや敵よと我軍は隊伍を整へこれに應じて戰
ひたり。この時彈丸飛ひ來り、先に進みし松崎大尉の足部に當てたり。
されど大尉は屈する色なく却て勇氣日頃に倍し、劍を抜きて直ちに
敵を切り立てんとせしに、又もや彈丸飛ひ來りてその頭を打ちたる
に、何かの以てたまるべき「ヤラレ」と一聲叫ひも敢へずそのまゝ息
の絶へたるは勇ましくもまた悼むべき事ともなり。

一方にては時山中尉おのか率ゆる兵士に令して林の前なる川を渡
り、敵の左翼を突かんずとて、真先に水に入りたるに兵士もまた後れ
しと續きけり。川幅は三間に足らぬ狭き所なりしかども、川底の泥濘
深かりし爲、水中身體自由ならず、爲めに我兵十數名を失ひしか、其餘
は無事に前岸に上りたり。

既にして進軍の令を傳へて敵の左翼に向ひて突撃したるに、清兵遂
に支へ得ず、己か幕營として退きたり。時に四時十分なりき。喇叭手の

白神源治郎の名譽に斃れしもの時なりけり。五時三十分頃右の村落を發し斜に成歡驛の西北方にある清兵の幕營に薄りたり。敵兵は數尺の砲壘を築きその前には松樹を切りて枝を積み天然綠壘を作りモセルの連發銃を以て頻りに我兵を拒みたり。彼は要害の地に依り精銳の武器を持つといへども清兵生來の迂遠なるはこの連發銃をとりて砲壘より半身を顯はして立射し讀け打ちに發銃したる後砲壘の窟に引き退きて彈丸を込め再び顯はれて無暗に發銃したるなり。依て我軍は銃に彈丸を籠めて地上に伏して敵彈を避け敵の盡く射撃し終りたる後ち再び身體を顯はし來る一殺那我軍は一齊射撃を以てこれをうつに斃るゝもの其數をしらす。

如此にして漸々敵營に近き遂に関を作りて松樹なる天然綠壘を劔にて切り捨てて砲壘を乗り越越て突貫亂入するに清兵大に狼狽し取る者もとりあへず。己か幕營を捨て一生懸命牙山の方へと逃げ行きたり。

偕て又左翼隊は午前五時二十分或歡驛の東北方の高地に達し第一砲列を布きて敵の幕營めがけて榴霰彈を打ち込みたるにもとより正しく距離を測りて放つことなれば敵の陣營の上に破裂して爲に死するもの多し。これと同時に歩兵も前馳して發砲を初めたり。砲兵も又進みて第二第三と陣地を布きかへ大に敵兵を破る。第四に陣地を移せしこと敵の砲彈來ること甚しかりし然れども我砲車の片輪をくだきたるのみなりき。而して大島長岡福島の諸將校の居られし所には尤も甚しく來りたり。こは清兵の我將校の馬背にありて指揮する様を見且つ勳章燦爛たるを望みて大將を打ち取らんとて頻りに大砲を打ちかけたれども天いかでかこの義戦をなせる勇武の人を殺すへきや。敵彈の一も諸將校を傷つくることなく空しく地中に落ち入るのみなりき。

敵の其の陣地の中央に在る月峯山にて死力を盡して守り居たれども右方の幕營は遂に我軍右翼隊の陥る處となりたるを見てはや怯氣のつきたるに、かて、加へて左翼隊の總攻撃に出遣ひ今は支えう可くもあらず。脆くも破れてはふくの體に逃げ延びたり。こゝに於て我軍は皆一齊に帝國萬歳を三呼したり。

如此我軍の破竹の勢を以て敵の幕營總數五ヶ所を陥れて全く我有に歸したるは七時三十分なり。清兵もどより狼狽して逃げたるを以て彈藥米穀旗武器の分捕數しれず。野砲の八門までも我有となりたりける。

それより我軍は各營に衛兵を置き全軍は直ちに牙山に向ひ行きけり。其の日の午後四時頃右翼隊まづ牙山に着したり。初め右翼隊は清兵は必ず牙山に於て我軍を迎へ撃たん覺悟なるべしと思ひ。その心して進み行きしに案外なるかな牙山には敵の隻影をも止めず。唯其武器糧食天幕軍服等の牙山の縣廳に山の如く積みたるものを獲せるのみなりき。依てこれを押收したり。韓人に就て問へり牙山にありし清兵百名程は騎馬にて今朝逃げ行きたりしといふ。いかに弱けれはどておのか味方の成歡驛に戦ひつゝあるを應援をもなさで敵の來る影をも見ずして早く既に逃げ出せしとはよく弱き兵士にあらずや。

左翼隊は又牙山に進む途中しばしば大雷雨に遇ひ行き悩みて漸く午後四時過頃牙山を去る三里金城洞といへる所に着し終にこゝにて露營せり。この夜の必需支那兵の夜襲あるべしと思ひて各々警戒してありしかども右様の次第にてなかく夜襲などあるべくもあらずその翌朝我軍無事牙山に着したりき。

この戦にて敵の死するもの殆んど五百名に上りしども我軍の死傷どもに合して七十名程なり。倍敵は皆何方へ去りしやといふに其多くは新昌縣を経て洪州方面へ逃げたりといふ。翌日分捕せし米穀は皆韓民に施し天幕旗彈藥の類は白石浦より舟

便を以て仁川に送りたり。これと與に病兵及び一中隊ばかりの兵を船にて送り返へしけり。其彈藥の分捕の夥しきはかく船に満載しても尙残り居たるを以てそれ等は悉く焼き捨たり。

我軍隊のそれより直ちに京城へと陸路歸り行き。八月五日の朝龍山に着したり。これより先京城公使館にて凱旋の方を歓迎せん爲め龍山に凱旋門を作り。公使領事を初めとして京城居留地の重なる有志者の皆こゝまで出て迎ひたり。又韓廷より特に勅使として李宗鏡を同しくこゝに出迎せしめ、且つまた南大門に紅白の幕をうち廻して松葉を以て凱旋の門を作りたり。

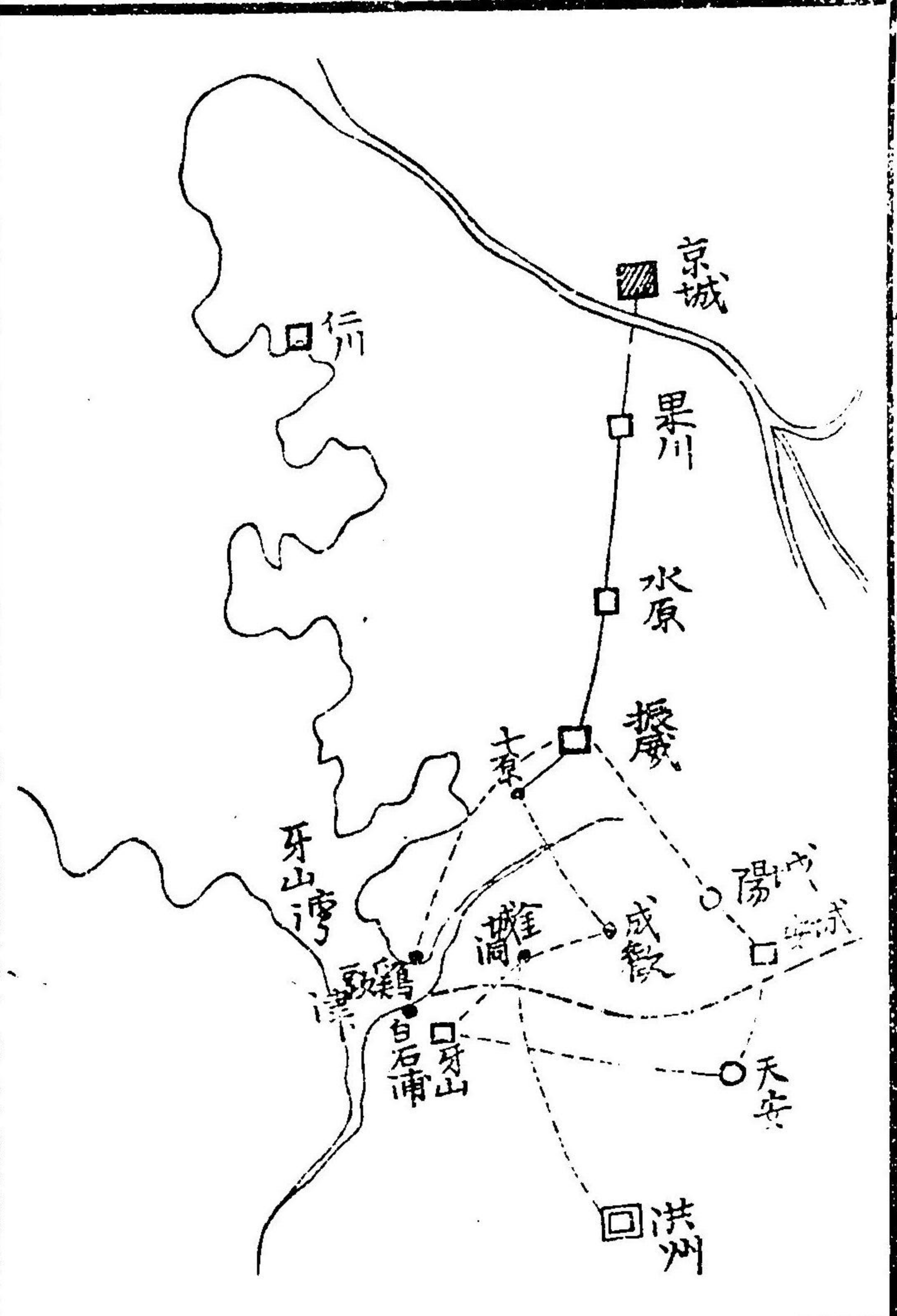
午前七時二十五分大島少將馬上優かに歸り來れ、軍隊の皆整列して門の傍に立つ。勅使のまつ大島少將に凱旋の祝辭と勞功とを陳へて國王の欣びを傳へぬ。少將の嚴然として一二の返禮を申せし後に大島公使の挨拶あり。それより 天皇陛下萬歲、朝鮮國大君主陛下萬歲、日本帝國軍隊萬歲を呼ばわりたる聲は天地もくづるゝばかりにて喜び極まりて涙の出でん程まで勇ましかりけり。右終りて樂隊は君か代を吹奏せしに軍隊一同敬禮をなしぬ。

式終りて軍隊は龍山、京城の各營にのゝ歸宿したりけり。この日午後大島少將は直ちに王城に伺候して國王に親しく戰況を奏したるに國王の盛宴を張りて大島少將を初め我將校を犒らひたり。

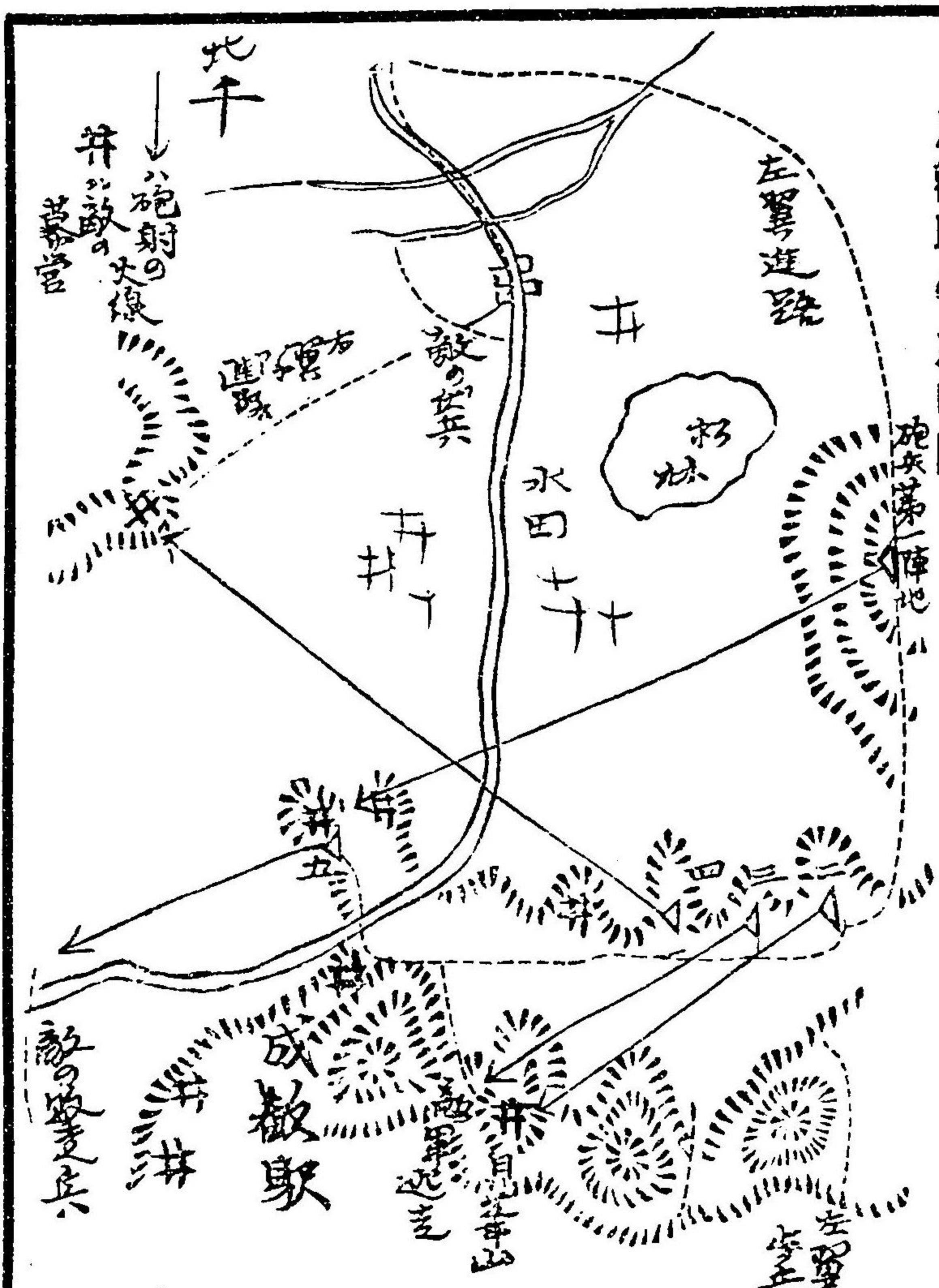
八月七日大島公使もまた南山和城盛に於て凱旋の祝宴を開き、陸海軍の將校を初め韓廷の官吏新聞記者居留人民有志者等を招待したり。軍樂囀鳴たる間に和氣霽々として滿場笑顔開き。皆十分の歡を盡して散會したりける。

* * * * *

京城及成歡牙山附近之圖



成歡戰爭之略圖



混成旅團橋頭堡劇戰之圖 近 刻
日清戰圖畫報 第三編 平壤ノ役ヨリ 近刻
海洋島海戰迄

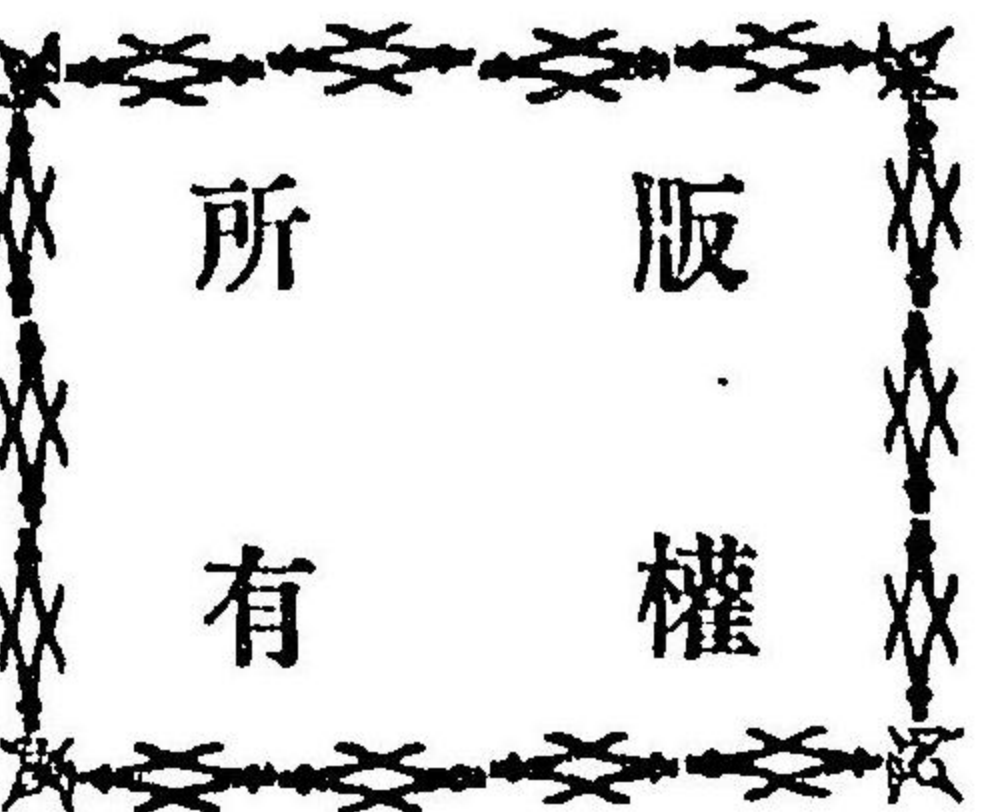
明治廿七年十一月五日印刷
同 年十一月八日發行

著 作 者 久保田米僊

著 作 者 久保田米齋

東京日本橋區通一丁目十八番地

發 行 者 兼 印 刷 者 大倉保五郎



東京日本橋區通一丁目十九番地

發 賣 所 大倉書店

全區小傳馬上町十二番地

削 剛 人 梅澤巳之吉

◎日清戰圖畫報第一編諸新聞批評

●郵便報知新聞批評

●日清戰圖畫報(第一篇) 帝國か議の爲めに清國に戰を宣するや畫家久保田米僊氏父子は他の年少血氣の人に伍して軍に従ふて朝鮮に入れり斯道に忠にして且つ勇なる獨り斯人のみ
畫報は則ち久保田氏父子か其の親から睹たるどころの山川風物及び兩國戰鬪の壯觀を描きたるもの而して其第一編は成歡の役に從ひたる米齋氏の筆するところ、傳家の筆法別に一味を加ふ披き看るもの身自から韓地に入り親しく山川風物戰鬪を接睹するか如し(價廿三錢通一丁目大倉書店發行)

●時事新報批評

●日清戰圖畫報 今度日本橋區通一丁目大倉書店より發行する畫報は久保田米僊氏の筆に成りて一家の顔致自ら他と異なるものあり引續き大戰の次第を描くに至らば頗る面白かるべし

●二六新聞批評

●日清戰圖畫報(第一篇東京大倉書店發行) 國民新聞の從軍記者久保田米僊、久保田米齋、父子二氏の著也日韓事件の經過を畫に依つて報するもの當に今人の眼を喜はしむるのみならず後人の紀念史家の參考として益するものあらむ

●自由新聞批評

●日清戰圖畫報(大倉書店發行) 日清戰圖畫報第一篇出の畫は米僊米齋金僊三子の筆によりて寫實したるもの米僊一流の墨痕躍つて紙上に自ら聲あり

●都新聞批評

●日清戰圖畫報(第一篇) 久しく韓地に在りて日清事件の成行を實見せる久保田米僊氏の筆に成れる圖畫を集めたるは此畫報なり圖畫眞に迫りて畫報中の王と謂ふべし發行所は日本橋通一丁目の大倉書店なり

●大和新聞批評

●日清戰圖畫報 第一篇は通一丁目大倉書店より發行せり在韓の畫伯久保田米僊氏同米齋氏が目のあたり寫されしなれば眞實の活畫と云べし紀念のため一本を購ふて可なり

●開化新聞批評

●日清戰圖畫報第一篇 久保田米僊米齋の二子が親しく從軍して目睹せし戰況を描きて是を木版色摺の風流なる綴帖に仕立て卷末に戰鬪の要領を附記したる畫なり通一丁目大倉書店發行

(右の批評は第二編印刷迄に批評せし分を記載す)

長岡護美君題辭○文學博士小中村清矩先生序文
大和田建樹先生序○小中村義象先生校閱並序
文學士高田早苗先生○明石中和先生校閱並序 林善助先生著

文部省檢定 教科書 新體日本歷史 全三冊洋裝美製本
正價金一圓卅五錢 郵税金廿二錢

開明史として其體を得教科書として其宜を得是本書獨特の專有にして世の學者論客本書を推して
近來の大家となりし所以也本書世に現る日尚淺し而今訂正第五版完成發賣の運に際して蓋數百部を以て一
版さす如き者にあらず其版は前版と相比して明瞭なるべし而五版の如きは新文新之を舊版に比す面
目同日に照るべからずと云ふ御覽を賜へ
本記叙法新創也政治引論精義論理野拔文學博渉内外に具佛法佛理を説く簡潔活潑印
風俗可憐可愛外交史の如きに至ては著者最精力を費し愛國人を起たしめ愛國心を切齒に及ぼす
五十個人物皆語り或は舞ひ器物歴々手に觸るゝ如し矢石親煙懐として寒く高眉豐頰油として夫酸なり

村上自彊先生編纂

中等教育 漢文學教科書

洋綴全二冊
正價金六拾錢
郵税金十二錢

讀書理解力の養成と作文思想力の運用を自在にして吾人の智識を充分に發達せしむるは此れ豈中等教
育に於ける漢文學の目的に非ずや……然れども從來世上に在る漢文の教科書類は概し皆空漠たる編成
の者のみにて秩然たる順序も無く整然たる階級も無きゆる修學上の不便なるは勿論讀書作文相須ら相養ふ
の目的に通ふ如き者は實に影なし……本書は之を徹し新目的を達せしめんが爲めに秩然たる修學上の
順序を立て中等教育の程度と學科時間の配當上に適合せしめんことを務めたり……且つ本書中の材料
は一方に偏せずして廣く和漢古今諸家の文章中に求め法格は嚴正に公事は明晰に立論正大筆力雄偉、風神
逸邁、會通流動最も精采有り最も趣味有る者を撰擇せり故に何人に限らず本書を閱讀して利益をうけらる
は勿し就中最も利益を受けらるゝ人は普通教育に従事せらるゝ教員生徒とす嗚呼社會は進化の軌道を走
り年月は急行の列車を驚す速かに一本を編きて人に落ちず各自の希望を遂げられ

明石中和先生校閱 林善介先生著

教科書 新體日本地誌

洋裝美製本全二冊
正價金一圓二十錢
郵税金十八錢

夫本邦の地誌の書其時夜の星の如ならず然れども本書始めて世に出るや世の公評に蒙る本書に比すべき
者一も之なし是れ固に此の如きなり固に此の如きなり各新聞雜誌は盛に評して曰く是より地誌
の權威一變せん此書に其府地誌なり曰く著者新而も地誌正統を究め曰く最良教科書なり曰く簡潔
にして最優なりと云く其言を得ん亦地誌實蹟を極む
以上の諸評世人の熟知する處にして此書を想像するに足る

理科大學教授理學博士橫山又次郎先生校閱
第一高等中學校教授篠野乙次郎先生著
文部省檢定濟

訂正 地文學教科書

洋裝美製脊革金文字入
全一冊定價金五十五錢
郵税金八錢

我國教育之隆盛なる百科の書一として備はらざる者あらざるなり然れども地文學の書に至ては其數實に驚
々として未だ其完全なるものを見ず蓋に二三の書の既に公にせられたるものありと雖も只原書の翻譯に
過ぎず骨節部にのみ精意に過ぎ却て讀者の困難を感ずるものあり之れを以て我國中等教育の教科として適
當なるものあるを見ず篠野先生深く地に感ずる所あり教育の程度を計り尋常師範學校及び尋常中學校の教
科用書に充つるの目的を以て廣く歐米の諸書を參考し平易なる文書を以て之れを記述し今や之れを世に公
にせられたり其事實を記するや簡にして明其學說を述べるや單にして瞭加ふるに各節皆索引問題を設け事實
を記述するに便ならしむ故に一讀して地文學の大意を了解し教科用書として適當なること他に其比を見ざ
るなり現んや博士橫山先生之れが筆を發し特に校閱の勞を取られたるに於ておや希くは江湖の諸君よ速に
本書を購求して世間幾多の同種書類の比にあらずして地文學書中第一頭角を顯したるの眞實たるを知り
賜はんことを

英國カサルテリ一氏著 日本宮崎言成譯
萬國商業地理書 洋裝美製 正價金五十五錢
全一冊 郵税金六錢

本書は凡そ世界各國人口の多寡、土地の廣狹、氣候の涼熱、交易の現況、天産物、製造の品質、各國貨幣
重量程度の比較より、通信の航路、鐵道電線の運接等に至るまで詳載して漏す所なし蓋に商業學校の教科
書に適し且つ實地商業家の指針と云ふべし有志諸君請ふ幸に一讀を給へ

前覺島高等中學校造士館教授 河野通章先生著
現茨城縣尋常中學校教授
日本商業地 洋綴全一冊 正價七十五錢
郵税金十錢

前覺島高等中學校造士館教授 河野通章先生著
現茨城縣尋常中學校教授
日本政治地理 洋綴全一冊 正價七十五錢
郵税金八錢

英國ホワイトリー原著 杉浦重剛先生序
論理原論 洋裝美製本 正價金五十錢
 全一冊 郵税六錢
 佐久間剛藏先生校補 小野太郎先生譯述

此書は大名全歐に纏つた世の學者仰て論理家の泰斗と爲す處のホウエー氏の原著「エレメンツ、オフ、ロジック」を名づくる書にして本書は專ら論理の原則を講述し其の之を講述するに一々圖解を示し讀者をして論理了解し易からしむつ其旨趣にして意欲く行文あり井然然れず惟ふに論理書の類世間既に稀に上れるもの夥からず蓋し其論理の正確なる未だ此書に右に出る者を見ず藤に本書は佐久間先生深切町時校補の勞を盡されたるものなれば愈々以て完璧の真書と稱するも溢美にあらざるべし抑々論理學は杉浦先生の序文にも見ゆるが如く管に之を尊論の完則に用ふのみならず亦以て百端の事物にも應用するを得たり今や國會開設の弊も近きかあらんよし又公會波流學術 談話日に月に旺盛に赴かんす是れ論理の深く深解せざるを得ざる秋也若し夫世間有爲の士にして言語文章の機關を利用して公衆に其意思を通せんご欲し或る時は會堂に辯舌を振ひ或る時は案頭に文章を草す此際必し其意旨の矛盾支離波却等に陥るの誤謬を避けんとする者は坐右欠く可からざる一大要書なり乞ふ一書を購置し其旨の蘊ならざるを知り賜はんことを

米國經濟學士彼理氏原著 日本川本清氏譯
改正理財原論 全一冊 正價金八十錢
 增補 郵税十二錢

本書は有名なる經濟書にして原序十四版に於り本譯書も訂正増補し既に第三版に至れり以て本書の江湖に高評を博せし所を知り得べし依て茲に贅言を不要に日次を掲ぐ
 ○第一經濟の來由 ○第二經濟學要旨 ○第三價值 ○第四交易 ○第五生産 ○第六勢力 ○第七資本 ○第八土地 ○第九生産費用 ○第十貨幣 ○第十一合衆國通用貨幣 ○第十二信約 ○第十三外國交易 ○第十四「メルカントイル」イストラム ○第十五米利聖國稅 ○第十六稅論等なり

英國大博士アレキサンダー、ペイン氏著
 日本宮中顧問官西村茂樹先生序
MIND AND BODY 心身相關之理 洋裝美製本 正價六十五錢
 全一冊 郵税金六錢
 谷本富先生 森本確也先生 譯註

一頁譯書出たりくく西村先生序して(以志世間増一頁譯書之屬)と註すべし蓋し其譯書たる所以は他ならず(第一)本書は師範學校中學校及專門學校等に於て心理學の初歩を教授するに最適當の教科書として採用せらるべし從來二三の譯書あれども孰れも皆な高尙に失せり本書の如きは一部の心理學通論を稱して可なる者ぞ(第二)本書はペイン氏の心理學は勿論其外諸心理學諸類を講習する者の必ず備へざるべからざるなり參考書とし心身相關の狀を説く所の如く詳密なるはなし(第三)本書は教育學の書なり蓋し智識體三寶の關係は本書を讀んで始めて明瞭にするを得べし(第四)本書中前載の精神論沿革史の一章は醫學家教育家の必ず購置せざるべからざる者なり(第五)本書は醫家特に精神醫學を研究する諸君にも亦最必要なり既に右五ヶ條の要件を具備する上に尙且つ譯者先生の苦心盡力を以て譯文平易流暢にして括弧圖等ならず一々丁寧なる註疏を加へ又原名をも挿入も隨處譯解の體ながらしむ江湖の諸君子速に購置せらるべし一頁譯書出たり

